

## 5. 記念講演 概要

テーマ 『 青少年健全育成活動と現代環境 』

講師：神奈川大学・東京学芸大学講師 久田邦明 氏

昨年4月22日突然倒れました。自宅に1人でいるときだったので自分で電話して救急車を呼んだので命拾いをしましたが、そのときの一切記憶がありません。家族が帰ってきた時に救急を見つけて同乗したそうです。最初に搬送された病院ではなく、より良い処置の出来る病院へと転送され、直ぐ手術になりました。病名は大動脈解離。私はいくつかの偶然により軌跡的に助かりました。

手術を終えてからは、川崎市内のリハビリ専門病院に7月7日から行きました。

そこで体を使うこと、言葉を使うこと、頭を使うこと？などをしました。リハビリをやりながら私は考えました。これは、リハビリでやっていることは、実は教育の基本ではないだろうか……。リハビリの担当者は、青森出身の若い女性で、偶然にもジュニアリーダーズクラブをしていた人でかなりしっかりした人でした。

7年前、秋田の婦人会連合会総会で講演を行ったことがあります。聴衆千何百人というような広い場所でした。

当時は100円の産直のブームでしたので、身近なところにリハビリがあるといいのでは、と考えました。1回500円位で、ワンコインリハビリというのはどうなのか、と考えました。しかしリハビリをするには医師が施設内にいなくてはならないなど、いくつかの規定があり、簡単にはできないことが分かりました。ワンコインリハビリができれば、若い人に担当してもらって活躍してもらうことも可能であるが、医師が必要などの規定があると、若い人には難しく、地位とお金のある人にしかやれないことになります。

NHKで（総合テレビ）「キッチンが走る」という番組があります。JAとやりあって家庭菜園をつくるのは難しいこと、おまけにJAのうしろには農薬を多量に使い、遺伝子組み替えをおこなうアメリカが控えているので厄介であります。

今後は新しいことを行う時には「対立」ではなく「並用」することです。以前は対立傾向が強かった日本が最近では併用という雰囲気になりつつあります。

先に触れたリハビリをやっている青森の女の子などが地元で暮らせるようにする。それこそが青少年育成であるはずですが。彼女は地元の青森に仕事がないので、やむを得ず上京しているだけで、本当は親のいる地元で暮らしたい、地元でいたいのです。

高度経済成長期の頃は、地方の人は、地元で産業などがあまりないので、でき

るだけ上の学校に行って、できるだけ大きい会社に入る。そうやって安定することを目的としている人が多かったのです。その頃の若者は高等教育を受けて一流の会社に入り？時代の先端を走っていた。今の若者は、パイオニア（開拓者）です。先駆者となり、昔とは様相が変わってきています。しかし時代の先端を行っていることは共通しています。そういう若者を応援することが「青少年育成」であるのです。

入院していた頃、生涯学習についての本を出しました。「生涯学習論」というこの本は学校モデルではないのです。その昔、中世のころ、街頭で絵を描いたり、説教を語っていた人たちがいました。当時はこういう人たちが教育者でした。

山椒大夫の小説は、昔話を森鷗外という作家がリメイクしものです。

2011年に東北に大地震があった。私が当時一番心配したことは放射能の被爆のことでした。しかし、現地ではそれどころではなく、もっと先にやることがありました。「すぐ隣にある死」であり、死体がごろごろしている状態であり、そのための片付けが先でした。小説の羅生門の時代も「すぐ隣にある死」ということにおいては、同じような状態だったと思われまます。

教育は学校だけでするものではない。教育が学校だけではない。

コーヒーの本にコミュニティカフェが乗っていました。ここは、地域社会のコーヒー店であり、人と人が接する場でもある。コミュニティカフェにおいては全国の交流会もあります。その交流会では色々な意見が出てくるのです。駄菓子をおいたら良いというアイデア、子供も来るようにしたら良い、というアイデアなど、沢山出てくるのです。

しかし子供が来ることについては、「うるさいから反対！」という人もいます。私は地域の老若男女、みんなが来るのがいいと思っています。

先の「生涯学習」についての本を出すと、次の本を出すことを考えるようになります。次は「子供、若者と地域社会」と言う本にすることを考えました。この内容はズバリ「青少年育成」です。私は各地で講演をしています、その講演の内容を入れることを考えています。加えて、各地で行われている新しい試みも入れようと考えているのです。

入院中から色々なことを考えていましたが、退院したら神奈川の佐藤さんから連絡がありました。話をしているうちに、佐藤さんも倒れたことを聞きました。東京の山本さんに連絡をしたら、「実は私も倒れた」という話がありました。会長が倒れたことが立て続けにあり、今後のことが心配になりました。私達の活動がなくなると、今までにやったことが途切れてしまうからです。今新たに始めるであろう活動はミッションに近いが、うまくいかないだろうと思っています。その理由として、青少年育成は工場生産はできないからです。お互いにある程度の共感がないとやれないことだからなのです。お互いの共感なくしてやること

ができないことだからです。

入院中に病院でテレビを見たら、偶然に??良くないニュースばかりででした。イスラムのフランスのパリでのテロ、九州の地震など・・・。

青少年育成は途絶えてしまっはいけない。まずは、若者自身が生まれ育った地元で生活できるようにすることが大切なのです。皆さんは「青少年育成」の時代の方々です。その時代の前は、地域が若者や子供を育てていました。地域のお祭りなどの行事には、昔から必ず子供が参加するようになっていました。京都の地蔵盆などは有名です。その後の時代になると、「青少年国民会議」が活動を停止してしまいました。

お祭り自体は青少年のためのものではないが、青少年育成になっているのです。青少年が参加する祭りや行事がないと言っていた地域でも、聞いてみると「子供神輿」があったりしました。「子供神輿」は立派な青少年育成のための方法でもあるのです。

現在もそうなのですが、地域の伝統行事がどんどん失われてきて、それによって青少年育成の機会も同じようにどんどん失われてきた時代がありました。丁度その時に「青少年国民会議」がスタートしたのです。当時の青少年育成は肩書などなくして、地域の人のごく自然に行っていたのです。今は青少年育成をする人たちは「アドバイザー」という名前をつけています。そういう名前の肩書を持った人が行っています。

「地域の子供は地域で育てる」という方針がありましたが、その方針を作ったのは地域ではなく中央でした。青少年育成が地域から盛り上がることを期待して創られたのです。地域の会長などが大会で集まると、そこで色々な意見が出てくるのです。しかし「では誰がやるのか?」という話になると、大抵は事務局がやることになるのです。わたしは、提案したら後は事務局任せにしないで、自分で、あるいは同志などを募って自分でやるべきであると考えます。そして、大きなことではなく、すぐにできる小さなことから始めるべきです。

1990年代に「子供の居場所を作ろう」と盛んに言われるようになりました。こういう問題になると、すぐにお母さんを対象とした啓発資料を作ったりしがちですが、お母さん向けの啓発資料を作っても意味がないのです。その訳は忙しいお母さんは日々する事が多くて読む暇がない、読む人はこうしなければいけないと混乱するだけに終わってしまうからです。

青少年育成には2つの柱があります。1つは「非行対策」であり、もう1つは「団体育成」です。非行も昔と今では異なっており、昔は心の乱れは服装の乱れ、と言われるように判り安かのです。昔型の非行は今に比べるとまだかわいいという印象です。今の本当の非行は昔のように外には見えないので、服装などで見つけることは難しいのです。

団体育成については、今の若者が「タコツボ」に入って出てこないように、多くの人や外部の人と接しないと云った現状があります。接しない理由は他の人と接して傷つけられないためということなのです。例として、昔はキャンプを主催すると面白そうだと参加する若者が多かったのです。ところが今では、そういう形で参加する若者は少ないのです。では、何をしているのかというと、1人でゲームをしているか、アウトドアはやっても家族だけでやる、という現状なのです。

私は県や市町村の活動報告を集めているのです。その中には「これは！」と思うようなアイデアが幾つかでてきます。そうすると、問い合わせで資料を取り寄せて、その資料を見て、次に講演を行う時の資料として使うのです。但し、そのために家の中が資料だらけになってしまっています。

次の活動を展望するのが「居場所づくり」であり、始めからその場所で行うテーマは決められないでしょう。「自由に集まって下さい。そこで何かやりましょう。」というスタンスになります。店づくりのアイデアもありました。小さいブースにトライアルとして店を出して見る試みです。若者が昼は自分で出した店を運営し、夜は彼らのために準備した経営や経理などの講座に参加するシステムになっているみせです。そこの小さい店で試してみて、うまくいきそうだったら地元に戻って自分の店を出す。そういう経緯で、若者が地元の商店街に居酒屋を出した例がありました。結果的に地元の活性化につながって、これも青少年育成の例です。

青少年育成アドバイザーは全国組織はですね、何が必要かって言ったら、最低限は情報交換が必要です。国民会議が果たした役割は大きいです。情報交換には事例の紹介も、活躍している人同士の意見交換もあります。昔は紙媒体が必要不可欠でしたが、私は青少年育成の雑誌連載を辞めた後、自分でブログ“青少年育成 NDT”というのを始めました。そこで後最近の動向について紹介したんですね子ども食堂とか、駄菓子屋もない町で育った子どもを紹介しました。そういうブログを作って紹介するのは割と簡便にできる気がします。それが必要だというふうにも思います。

最後に、歴史を途切れさせない。日々の生活が子どもや若者を育てている。そこから青少年育成の時代が展開し、今青少年育成の次の時代を迎えようとしています。そこで、過去を途絶えさせないと言うのは、過去にいろんな歴史があるんですよ、それを清算しないで、続けていく必要がある。それを申し上げたかった。

私ももう力は十分はありませんけれども、今回役に立つならばと、今日はお話をさせていただきました。長い間ご静聴ありがとうございました。